

2011年近未来チャレンジ論文特集にあたって

阿部 明典

(千葉大学)

まず最初に、今回の論文特集に論文が1本しかないことに気付く方が多いかもしれない(論文誌 Vol. 28, No. 1, pp. 1-12, 2013年1月5日より公開)。実は、近未来チャレンジの論文は一般の論文とはやや異なった書き方を強いらられる。つまり、チャレンジの内容を記述しながら、学術的な内容も必要である。それが理由で苦勞される方もいらっしゃる。今回は、さらに、いろいろな理由が重なって1本となってしまった。新鮮さを求めて、投稿から1年以内で掲載をするのであるから、かなりきつい日程でもある。一般論文、速報論文よりかなり早く掲載されているのではないかと思う。そのあたりは近未来チャレンジのメリットの一つと見てもよいであろう。2013年度から Call For Paper で明文化されるが、チャレンジャーには、論文投稿の“権利”がある。近未来チャレンジをすることのメリットについてよく指摘されるので、今回はまずこのメリットを書いた。それ以外にも、例えば、初代の卒業生である矢入郁子さんが常に主張していたことは、いろいろな、特に普通に研究していたら出会えなかったようなところからコラボの話が来るということであった。無料で公開されている論文を見て、コラボの話が来たようである。

そして、一番大きなメリットは、学会のサポートを受けて自分で研究分野をつくり、いろいろな研究仲間をつくっていけることではないかと思われる。人工知能自体がまだ若い研究分野でいろいろできるということもある

が、自分で提案した分野で先頭に立って引っ張っていくことは、研究者にとって、かなり貴重な体験であろう。オーガナイズドセッションでもできるのでは?? と反論される方もいらっしゃるかもしれない。しかし、毎年、全国大会の参加者からの審理を受け、それを勝ち抜いた研究分野は人工知能としても重点的に支持すべき分野であると認識されたと理解できる。オーガナイズドセッションは、チャレンジを卒業した後でもできるし、卒業をすれば、2種や3種の研究会も立ち上げることができる。ぜひ、積極的にトライしていただきたい。学会としても、卒業したチャレンジに関しては、積極的にサポートをしているつもりである。

例えば、2102年度の全国大会では、2011年度にチャレンジを卒業した「認知症予防回復支援サービスの開発と忘却の科学」に関して、大武美保子さんに卒業セッションとして、「認知症予防回復支援サービスの開発と忘却の科学」を企画していただいたのと、前号(Vol. 27, No. 6)でも紹介したが、システムに関して展示もしていただいた。

チャレンジの後は、どうなったのであろうか? という疑問に関しては、「近未来チャレンジ—その後—」という企画を学会誌で立てる予定である。

本稿を読まれてチャレンジをしてみてもいいかなと思った方、まだ間に合うはずです。是非、申し込んでください。